



## 女子学生の

## 就職問題のむずかしさ

大江直吉

大 学

現代は大学生になることが大流行の時代である。そこでまず遭遇する問題は大学生になる資格試験ともいへば入学の関門であり、次に四年間の学業を終える際に起つて来る「就職の問題」がある。

就職の問題は、幸いここ数年来、日本経済の高度成長に伴う、各種企業の設備投資によって大型化、近代化され、生産が著しく向上し、貿易が伸び、また国内の経済界全般の好況に支えられて、就職難といったような、戦前のジメジメした空気が払拭されている。働く仕事をいくらか求めても見当らないといったようなことはほとんどなくなった。

しかし大学卒業生の就職はそれでは全般的に底抜けに明るいかと言え、決してそうではない。日の当らない、日陰の部分が相当あ

る。どこかと言えば、教育学部、文学部方面の男子卒業生と「女子学生の就職」である。

女子学生の就職の問題はなにも最近に起つた事柄ではない。以前からこの問題はくすぶってはいたが、特に最近では「女子学生亡国論」といったようなジャーナリズムの表現によって、女子学生の勉学と就職の問題が強く世人の注意を引いている。また住友セメントの磐城市にある四倉工場において、女子社員との結婚による退職強要の問題が起り、裁判沙汰になり、東京地方民事裁判所の法廷では、原告の主張を全面的に認めて、会社側が敗訴した事件があった。

こうした事柄は強く世人の関心事となつていくようであるが、その根底には、日本における『女子の労働、就職』についてのものも

ろの問題が潜んでいる。

女子学生の卒業数が増大の一途を辿つていくこと、それに伴つて卒業する学生の中から就職について真剣に考える学生が続出し、職を求めめる声が強くなり、この要求に対応するだけの就職の場が、現在のわが国の社会には存在しないとくに、女子学生の就職問題のむずかしさがある。

たとえば昭和四十二年三月にはどのくらい女子学生が卒業するかを調べて見ると、四年制、短期大学生をひっくるめて、約九万人である。その内訳は、四年生大学で約二万六千人、短大で約六万四千人となっている。短大卒業生に到つてはほとんどが女子学生で、卒業生総数約八万人のうち女子学生の卒業生数は約七九%にあたる。以上のような多人数

の女子学生が、わが国では卒業するのであるが、はたして今年度はどの程度就職が可能であろうか、今後の集計にまたねばならないが、昨年度（昭和四十一年二月末現在）においてはどの程度の就職が決定したかを参考までに記して見ると次のようなデータとなっている。

四年度大学では約一万人余就職決定しているが就職希望者が約二万九千余人であるので、決定率は約五六%であり、短期大学においては約一万五千七百余人で、全体の就職希望者三万三千五百余人と対比すると約四六%の就職決定率となっている。四年制大学並びに短期大学卒業生の女子の就職決定者を合計すると約二万六千人程度であって、全体として就職希望者の約五〇%が就職していることになっている。

以上がわが国における女子大学生の卒業生の昨年度における就職状況の概略である。

\*

それでは同志社大学の実状はどういう状況であろうか。

最近三ヶ年間の状況を記してみることにする。（就職部で把握した数字による）

#### 昭和三十九年度

卒業見込者数（女子） 四五四名  
就職希望者数（ $\text{〃}$ ） 二一三名  
就職決定者数（ $\text{〃}$ ） 一六八名

#### 昭和四十年

卒業見込者数（女子） 四三二名  
就職希望者数（ $\text{〃}$ ） 一一〇名  
就職決定者数（ $\text{〃}$ ） 九四名

#### 昭和四十一年度（四十二年二月末現在）

卒業見込者数（女子） 五四九名  
就職希望者数（ $\text{〃}$ ） 一四二名  
就職決定者数（ $\text{〃}$ ） 一〇八名

同志社大学においてはこの表にてもわかるように、大体毎年、平均約百名前後の学生が就職しているが、卒業生全体の比率からすると大体二〇%から三〇%程度である。その職場も多種多様である。各種の製造業から貿易商事、教育、新聞、放送、印刷、出版に到るまであらゆる職種に及んでいる。

また産業の規模別にしても、巨大企業から中小業はもちろん官公庁に到るまで、その就職の領域も甚だ広い。地域別にこれを見ても通勤距離の関係もあって、大阪、京都、神戸が中心であるが、東京方面にも、また中京方

面にも就職している人が相当数ある。その勤務地は自分の居住地を中軸にしてその周辺が多い。

\*

女子学生の卒業生が年々増加し、また卒業生の増大に伴って、真剣に職業を求める学生数が急激に増加しているにかかわらず、現実の就職の場は、それに比較して甚だ少ない。また職場の増大が甚だ困難な状況下にある。それには種々の要因が考えられるが一つは女子学生諸君の側に、その責任の一端があることも否定出来ない。

第一に女子学生は就職について、しっかりと職業観、人生観といったものを持った人が非常に少ないことである。

女子学生にして就職を希望する場合に一番問題になるのは、自分の仕事に対して深い決意をもって臨もうとしないことである。だからたとえ就職しても、ちょっとした困難や職場での多少の不快なことに遭遇すると簡単に辞めてしまう。確固たる職業観についての決意のない証左であろう。

第二には女子の場合に自分の仕事以外の世界に本来の目的を置いている場合が多いこと

である。従って現実の与えられている仕事は生きる手段であって、目的は他にあると言える。例えば職場は結婚するための準備金を生み出す場であったり、お茶やお花を習得したり、レジャーを楽しむための費用調達と考えていることが多い。従って、そこからは仕事についての高い創意や工夫、更に改善への意欲はそこから生れない。

第三には仕事についても、幸い良い仕事で自分に適した仕事であればやってみるが、不愉快であればやめてもいいという態度である。なるほど職場や職業を選ぶ場合に、以上の要件はもちろん無視することは出来ない。しかも男子の場合に、この仕事は自分に都合がいいからやってみよう、この仕事はたまたま自分に適していないと思うからやめておこうといった自分の気まま本位の職業選択は、許されていない。たとえその仕事で自分に適さないとと思う職場が与えられたとしても、それにじっと耐え忍んで行かねばならない場合が非常に多い。一片の気分やその場の思いつきで仕事が簡単に替えられるものではない。

次に女子学生の「就職年限」についても、多くの問題がある。四年制大学の卒業生につ

いて、東京のA大学の調査によると、最近六カ年間に採用された四七〇社の企業（ただし教育関係を除く）を対象にしたもので、そのうち解答のあった三六八社（七八％解答）の報告であるが、採用されている人数は九〇九名で結果は次のようになっていた。

二年間で約八〇％辞めており、四年たてばほとんど全部がやめている。そして四年制卒の女子学生の就職年限は平均して一年四ヵ月と二十七日ということになっている。

以上の諸点は女子学生諸君の欠点のみを摘み出している印象を与えたようであるが、その立っている困難な現実をまず充分に認識することが大切であると考えたからである。

反面女子学生のそうした主体的な問題点以上に、外的な、女子学生の就職をはばんでいるものもろの厚い壁がある。残面がないので、把めて簡単に述べると、

第一に、女子学生の働く職場は、現在のわが国では非常に狭いことである。

第二に、男子と女子卒業生との賃金が相当に開いていることである。

第三に、女子学生がせっかく身につけた智識、技術、経験などを充分に還元させる場が

大学女子学生の就職状況

1967.3.15

年度別	規模別	巨大企業	大企業	中企業	小企業	教育方面	その他	合計
1964		33	25	18	19	29	29	153
1965		15	7	11	10	24	35	102
1966		24	16	13	6	26	15	100
合計		72	48	42	35	79	79	355

年度別	地区別	大	阪	京	都	名古屋	神戸	東京	その他	合計
1964		64	44	4	7	14	20	153		
1965		39	42	2	4	5	10	102		
1966		37	33	0	5	11	14	100		
合計		140	119	6	16	30	44	355		

年度別	業種別	繊維化学	機械金属	印刷出版	証券金融	商	事	サービス	教	育	その他	合計
1964		17	3	7	4	25	26	29	42	153		
1965		9	7	9	1	12	20	24	20	102		
1966		12	5	5	4	16	15	25	18	100		
合計		38	15	21	9	53	61	78	80	355		

\* 巨大企業;資本金10億円以上 大企業;資本金1億~10億円 中企業;資本金1000万円~1億円 小企業;資本金1000万円以下

あまりにも少ないことである。

第四に、その仕事が概して単純でかつ補助的労働であつて、また昇進、栄達の制度が講じられていないことである。

第五に採用者側の意識に問題があることである。それは人を雇用するのはその労働力を買うことであるが、女子を雇用する場合に『あなたの娘さん(或はお嬢さん)を責任をもつてわが社はお預りします』などという言葉が入社の場合に企業側の挨拶に出て来ること、等である(男子の場合はこうした挨拶は決

して聞かれない)。

以上の諸点は、今後、女子学生の職場を解決する場合に大きな壁として横たわつてゐる諸点であるが、これ等の困難な問題は、政治的、社会的な視点に立つて改善するべきは当然であるが、また女子学生諸君においても自分を取り囲んでゐるその環境をよく認識し、自分の主体的な弱点を謙虚に反省して、職業人としての自覚を高めて、托された仕事に強い情熱をもつて立向うことが何より大切である。(大学就職部長)

## 女子大生と就職

井上幸

女子大学

五月の中旬に就職に関するガイダンス、登録を済ませると六月初旬からぼつぼつと新しい年度の就職戦線がはじまる。ガイダンスでは「女子の就職の在り方と心構え」毎年の就職状況「書類作成上の注意」等を細かに説明

し、質問を受ける。一応は最終学年の約半数の人員が求職票に登録をする。しかし、この内何名が果して真剣に就職票に取り組むかは疑問である。七月、九月および十月に集中して求人申込みがあり、一流会社は主として

この時期に多い。

就職希望学生に求職票を提出させる時、就職希望の理由をきいてみると次のような結果が表われた。

- 1 経済上絶対就職を希望……………八五名
  - 2 経済上よりも修得した学問を生かす観点から就職を希望する……………一三五名
  - 3 適当な就職先があれば就職してもよい……………四〇名
  - 4 両親はそれほど希望しないが自分は就職を希望する……………一七名
  - 5 それほど就職を希望しないが両親は就職することをすすめる……………〇名
  - 6 その他……………二〇名
- 集計の結果2の項が一番多く、5の項が皆無ということは、当女子大学々生の家庭の豊かさを表わしているように思われる。この昨年五月に回収した求職票二七七枚(卒業者数の六一%)は卒業期には就職決定者一五一名(卒業者数の三三%)、未決定者七名となり残りの者は就職を取り止めた。

\*

女子大生は一般にと言つてもいいかどうかからないが、当女子大学においての就職に

対する考え方、希望は「一流会社のオフィスで結婚するまでの腰掛け程度に勤めたい」というのが本音ではあるまいか。就職してからの仕事をライフワークと考える者は就職者の何パーセントいるだろうか。就職時の態度は男子学生の真剣な態度とは違い少々なまぬるい感じがする。その証拠に夏休みの学生の就職に対する態度をみるとよくわかる。

縁故で運動している者は別として、学校に就職依頼をしていた者も夏休みになれば地方の者はさつさと帰省し、地元の方ですら学生課前の公示を見に来る者は少く、夏休みに限って一流会社の求人も割合多いのに、掲示板の前は閑古鳥がなっている。そういったわけで惜しくもその求人を見送る場合がしばしばある。求職者にはプリント刷りて求人通知を送つても応募者は僅かである。

夏休みに入ると学生課員は手分けして各会社を訪問する。その目的は新しい会社なら求人を依頼し、卒業生の勤めている会社なら御礼かたがた彼女らの消息をきき、今後の求人依頼する。真夏の強い日射しをあびて一日に数社訪問するこの仕事はなかなか大変である。会社で人事課の方に会つていろいろ話す

うちには、「女子の大学卒業者は勤務年数が短いので困りますね。折角いい方に来ていただいて養成期間を済ませいざ本番となる頃に退職を希望して来られるが、結婚退職の場合には止むを得ないですね。二年修了生の方が少しは勤務年数が長いように思いますが、これとでもいつ退職を希望されるかわかりませんのでね。けれども大学卒の方は短大出の方たちより理解力が早くて仕事をすぐ呑み込むのといったことが必ず聞かれる。会社の方でも女子の大学卒業者は勤務年限が短いということとは周知しているようである。女子の大学卒業者への求人数の少い第一原因はこのことにあるように伺われる。

\*

夏休み前に本学では毎年就職希望者のために就職懇談会というのを開催する。これは女子大卒業生の中で各方面の職場で活躍している方々を招き、その職場の様子、入社後の心得等を懇談して頂く。古い卒業生たちは職場の先輩としてこまかい注意を与えて下さるし、新しい卒業生たちは自分たちの入社試験や面接の体験から当時の様子を話して下さい

る。それに対して学生からの質問は多く、いつも時間が足らないほどの盛況である。

夏休みが終ると学生は卒業後の方針を大体決めてくる。就職希望の取り消しもこの時期が多い。九月、十月は女子の求人数のピークであり、公示板はいつも満載である。いい所があつたら申込みもうという顔でいっぱいである。縁故関係で決定を報告に来る数もふえる。窓口は忙しくなる。求人申込みの書類整理、求人通知の掲示、求人申込み外来者の応待、不採用者への返却書類の処置など。それに学生からの申込みがあると期日までに書類を提出させ推薦状を作成し、紹介状を添えて発送する。今年には昨年比べて各社とも求人難であるゆえ、大会社への縁故入社が多く、学校紹介の先決取消しが続出し、その度に会社へお詫びを申し入れる破目になった。学校紹介の場合二、三社受けても先決優先であるが、学校紹介で決定していても、縁故公募で受けたのが通つた場合、結局学校は無理に引き止めも出来ず、本人は行きたい方へ行くようになる。十月頃に採用が決定すると卒業までの半年間にいろいろの事情が起こつて、例えば縁談がととのつたとか、就職意欲がなくなつた

女子大学の就職状況

(1967.3月調)

	1964年度			1965年度			1966年度				
	英文学科	家政学科	音楽学科	英文学科	家政学科	音楽学科	英文学科	家政学科	音楽学科		
教職関係	9	14	3	26	13	8	1	22	7	3	10
会社(事務)	38	13		51	30	9	1	40	54	16	70
出版・放送	3	2		5	4			4			
ホテル・航空	3			3	4			4	12		12
大学研究室	21	27		48	23	18		41	17	20	37
病院(栄養士)	2	9		11		7		7		3	3
音楽教室			7	7		4		4		5	5
官庁・その他	14	2	1	17	13	1	1	14	10	4	14
合計	90	67	11	168	87	43	6	136	100	46	151

	1964年度			1965年度			1966年度					
	英文学科	家政学科	音楽学科	英文学科	家政学科	音楽学科	英文学科	家政学科	音楽学科			
卒業生数	235	152	20	407	266	162	16	444	281	151	22	454
求職者数	104	70	11	85	101	54	6	161	103	50	5	158
決定別												
学校紹介	34	38	0	72	41	20	0	61	56	24	5	85
縁故関係	56	29	11	96	46	23	6	75	44	22	0	66
計	90	67	11	168	87	43	6	136	100	46	5	151
就職率 %	86.5	95.6	100	90.8	86.1	80	100	84.9	97	92	100	95.5

とかで採用を取消しにする場合がたびたび起こってくる。これは女子学生にのみあり得る事実であろう。豊かな生活がそうさせるのであるのか。もし就職せねばならない生活状態の学生であつたら、このようなことは全くあり得ないだろう。卒業式間際に窓口にかけて来て来る学生も毎年数名はある。今まで何をしていたのか、真剣に就職しようと考えていなかったのか、卒業後家でふらついているのも嫌だし、どこかいい所があれば勤めてみようかしら、という気持ちで来る者が多いらしい。こちらの方がいらいらしく。

\*

こう書いて来ても女子大学卒業生全部が就職に対して甘い気持ちをもっているのではない。卒業生の中には立派な仕事を永く続けている方々も多い。本年三月に英文科研究室が、第一回卒業生以来の調査をした結果をみると、全卒業生数二四八七名に対し、返信数一四〇三名、うち在職者は三三四名である。その職種の内訳は各方面にわたっているが、中でも各学校の教員講師が四〇%をしめている。ということは、教員という仕事は女子に適職であり、四年間の勉学が直接生かされ、ライフワークとして長続きする職場であることが証明される。教員といえ、毎年府県別の教員採用試

験には十五、六名がパスしているが、パスはしたけれど欠員がなければ採用されないの、運悪ければ一年間を棒に振るといふ結果になるが、縁故に頼って産休中の講師とか、非常勤講師の形で入り込み、本採用になっていく例が多い。教員以外の職種としては、一般事務、秘書、スチュアードス、出版、放送関係等である。家政科の場合の職種は、教員、病院または会社の栄養士、料理学校調理助手、大学研究室の助手、紡績会社女子寄宿係、一般事務等である。栄養士などには比較的永年勤続者が多く、市内の保健所や病院、会社で活躍して居られることは喜ばしい。或る夏、就職先開拓に出かけた時、伊丹空港でグラント・ホステスとして働らいている数名の卒業生に会った。この仕事は空港ロビーで内外人乗客の案内や困っている人のお世話であり、語学力も要望され、ときばきと気転を利かしつつ処理して行く仕事であるが、全員立派に勤務している様子を知ると、さすが大出で嬉しい気持ちになる。女子大卒業者の就職数は少ないが、勤務年数は短くても社会の要望に答える人を送り出すようわれわれは努力している。

(女子大学職員)



## 女子高校における進学指導

児玉知佳子

私どもの学校では毎年生徒の組替えが行なわれる。それに伴って担任教師も入れ換わる。

進学指導は高校一年から行なわれているが、授業の関係で高一を担当したことの無い私は、具体的にどのような指導が行なわれているのか、ここに述べることが出来ない。高校二年になると、私はまず家庭との連絡を密にし、お互いの考え方を理解しあえるように可能な範囲で会合を持つように計画する。それも成績を渡すとか、生活態度について注意するとかいうことではなく、また個々に話合うのでもなく、級全員の父兄に案内を出して出来るだけ出席していただきやすい日時を選び、テーマを決めたり、テキストを持ったたり、手芸をしたりしながら午後二、三時間話し合いをする。そうすることによって、生徒を

より深く理解することが出来るからである。

また私の経験を通して感じることは、進路決定にあたっては、教師の考え方よりもその家庭の、特に母親の考え方が強い影響力を持っていると思えるからである。

では、現在の女子高校生たちは大学進学についてどのような考え方を持っているのだろうか。昨年七月十九日発行された同志社女子新聞に「大学進学に思う」と題してアンケートや感想がのっているので、しばらくその説明を借りよう。

私達は何のために大学へ行くのだろうか。現代の世の中では大学へ行くという事も世間並みの事と考えられている。私達女性の場何を得ようとして大学進学をめざすのかこれは興味ある問題だ。

この事について高校生百三十一人にアンケートをとった結果は次の通りであった。

- 46人 教養をつける
  - 16人 自主的にやりたい事をした
  - 12人 なんとなく行く
  - 11人 勉強したい
  - 9人 就職のため
  - 7人 結婚のため
  - 7人 社会に出る勇気がない
  - 6人 何か得られる
  - 3人 行かない
  - 14人 その他
- いったい一般女子高生で何かを得たいとか教養を身につけるためとかの理由で幾人が大学へ行く事が出来るだろうか。私達の与えられている条件が一般の女子高校に比べ

て非常に有利なものであるという事も自覚してその環境をフルに生かせるよう努力しなければあまりにももつたないと思う。

以上のような反省のあと、校内の先生方の意見、生徒たちの意見、先輩・同大生の意見を掲載し、高校生活と進学の問題という論説も掲げて皆の自覚と反省をうながしている。

このように新聞で、ホームルームで、授業時間中に、クラブ活動の後の雑談で、とあらゆる機会をとらえての問題提起に彼女たちは進学という問題を考えざるを得ない状態に追いこまれる。それを家庭に持ち帰って話題にする。彼女たちは彼女たちなりにいくつかの目的と希望を具体化して行く。だから担任が「何のために」という質問をすると大半の人たちが自分なりの意見を持つている。しかし私たちは項目に分類されるような質問のされ方をする——しかも例の質問紙法でくわしく説明の出来ない、イエスカノーか〇印をつけるという——いとも単純に分けられてしまつて、この新聞に示されたような結果となるが「大学進学に当つて」と題する討論会では「具体的に何かをやりたい」「出来ればずっとその専門的な勉強を生かしたい」という人が

多かつたし、また次のようなことも話し合つた。

はっきりした目的がないにしても社会に入る準備を完璧にするということだけでも大学進学は意義があるのではないか。またはっきりした目的なしで大学へ行くということに対して反発を感じないわけではないが大学に行くということによって人間形成の上で何かが得られる。

\*

このように高校二年生の一学期・二学期は大学進学についての考え方をいろいろ話合つてみる。また一歩進んで、いよいよ具体的に学校を決定するに当つては、親は女子中学生入学当時から出来ればずっと大学まで学内で進学させたいと思つている人が多いようである。生徒たちはどのように考へているのであるか。本年三月十七日に行われた卒業式の女子高校代表の答辞の中に次のような箇所があった。

六年前私達は多くの競争者を突破して女子中学に入学を許可された。胸にその日から輝く六角形の同志社マークは私共の誇りであった。それは優秀な学校だという世間の

評判があつたから、又設備がよいから、その他いろいろ外的な評価に対する自信と誇りであるように思つていたがこんなに愛着をおぼえるのは私が同志社を愛しているからだという事を今はっきり感じます。

親や親戚・友人や先生から勧められ、女子中学に入って五年目高校二年生になつて、将来の進路を決めるに当り、私は一卒業生が語つたこの答辞はよく自分たちの心を伝えていふと思う。ほとんどの生徒が在校中に新島先生の考え方・生き方を知り、聖書の教えにふれ、誇りを持つて同志社の学内大学に進学したいと考へるようになるらしい。学校が決まると次にはもつと具体的な問題に取りくまなければなくなる。そこで高校二年の三学期頃には、先輩を呼んで各学部学科の説明会をひらいたり、教授たちに出席していただいで説明を伺つたり、各学部のパンフレットを教室において自由に貸し出ししたり、受験雑誌をそなへつけたりする。

\*

高校三年生に進級すると早速担任との個別面談が時間をかけて行われる。学校・学部・専攻科目まで決めて調査書を三回提出しなけ

ればならない。第一回目は六月下旬、第二回目は七月下旬、共に中間・期末テストの成績を見て、果して希望の専攻科目を充分勉強して行けるかどうか反省するためである。最終的に十月下旬に提出すると他校受験はさておき学内進学の場合、原則としてよほどの理由のない限り変更は認められない。なぜなら、四高校の推薦会議が行われる十二月中旬までに、高一・高二・高三の一学期までの成績を荷重平均したり、実力テストを計算したりして、進学希望者一覧表を作成しなければならぬからである。また会議の資料が成績だけに片寄らないため在校中の生活態度、出欠状況特に遅刻、欠課等の資料を集める。出来るだけ客観的にしかも公平であるようにしなければならぬので高校一・二年の正確な記録が必要となる。専攻科目決定に当っては本人の希望が優先するが、それまでに学部・学科の大学側から示される基準に該当しているか、本人の適性があるか等を知るため、新学期早々の放課後何人かずつ希望者を集めて進路適性検査をしたり、過去の成績をしらべたりする。私が話し合ったところ、専攻科目の決定に当っては、大体次のような四つのタイ

プに分けられるように思う。

- a 初志貫徹型
- b 一任型(両親の希望)
- c 道づれ型(親友と共に)
- d 混乱型

現実には、a b c dの要素が絡まりあつていることが多いのでそのような生徒を担当が指導して出来るだけ適正な進学が出来るように留意している。本人と家庭との意見が一致している場合は比較的簡単だが、異なっている場合は、親と担任、生徒と担任、親と生徒と担任等個別面談を何度もくり返して納得してもらわねばならない。四・五年前までよく聞かれたことは「女子高に入れば自由にとこへでも学内大学にいけると思っていたのに」とか「世間では同志社に通っているから当然大生もと思っておられるのに今更この成績では駄目だと言われても困る」とか言われ、担任の方が途方に暮れたものだ。成績が一定のラインに達していなければ推薦されないことは、高校一年入学の時にくわしく説明されるはずなのに、希望通り成績がとれなくて、なおかつ何とかなると思っていた人々があつたが、さすが最近一、二年は上級生からの噂も

あつてそんな押し問答はなくなった。特に今年は高校三年で担任をしても、もはや進学指導を行う余地もないくらい各自が決定してしまつていて、三年生の一学期・二学期のテストと二回の実力テストとに最後の望みをかけて猛勉強という態勢であつた。他校の人々が考えているように決して、のほほんとして推薦されるのではない。高校一年生からの生活の毎日毎日が大変であることを知っていたのだかと思ふ。もちろん今春の入試のように何十倍もの受験生が押しかけると、たつた一度のチャンスにうっかりしくじつた優秀な生徒に比べ、高一での失敗を高二で、また高三でとチャンスが与えられることは、確かに特権である。しかし彼女たちはそれをよく意識している。それだからこそ「われわれ推薦入学者は何をなすべきか」よく考えているし、また「いかにして大学生活を送るかを真剣に考えている。次に学内進学といつても音楽とか家政とかを専攻したい女子大希望者は別だが、英文学科は同大にもあるので学校決定には私共も相談にのるが、中高とも女子校であつたから、また中学入学の際は親の決定権が強かつたが今は自分の意志で共学に決めたいと

いう人もある。以上のような大半の生徒に比し、他方

a 学内大学に設置されていない学部学科

目の専攻したい

b 家計の都合上

c 自宅通学の便宜上

d 婚期の問題上

e 母親の母校に是非進学したい

f 自分の学力を受験でためしたい

g その他

このような理由で最初から他校受験を志し

ているものもある。彼女らは相当具体的に決定してしまっていて、われわれの指導する余地があまりない。けれども a・b・d 等の関係で短大を希望する生徒も若干名あって、相談をうける場合にはそれぞれの校風を考え、またかつて進学した先輩の実力・性格・生活態度等から考えて個別指導する。

最後に高校卒業後の進学状況をここに記したいと思う。

\*

卒 業 生 数	短 大	その他四年制大	同志社女子大	同志社大	年 度 (昭和)
276	14	16	23	58	30
251	18	5	39	46	31
271	18	8	47	72	32
289	6	7	38	74	33
287	28	16	45	74	34
290	30	13	47	89	35
291	45	5	50	93	36
283	41	4	52	111	37
251	38	5	32	114	38
263	36	8	49	135	39
281	21	2	58	165	40

学外四年制大学の内訳

37年度 芸術大・津田塾大・ノートルダム女子大

38年度 子大・竜谷大

大阪音大・光華大・東京女子美大・日体大・ノートルダム女子大

39年度 青山学院大・お茶の水女子大・京大

美大・京都薬大・近畿大・東京女子大

大・日本女子大・武蔵野音大・文化女子大

40年度

京都美大・奈良女子大

短期大学の内訳

池坊学園・大阪音大

・京都女子大・成安女学院

・聖母女学院・帝塚山学院・平安女学院

かくのごとくわが校から他の四年制大学への進学者数はあまり多くない。大半が推薦による学内大学進学者である。推薦制度による進学者と受験入学者と学力の点で差があつては困るので本校側としても高校時代の学力充実を考慮することはもちろんであるが、進学者の追跡調査を行い、大学側の御協力を得てこの恵まれた制度を安易に流れることなく自覚し、積極的に活用して行けるよう今後ますます努力して行きたいと念願している。

(女子中高教諭・家庭)

# 女子寮の果たした役割



宮下千代

女子は仮名本くらいが読め裁縫や料理がで  
き和順なのがよいといわれて女子教育の軽ん  
ぜられた明治初年に、新島先生はその夫人を  
々お八重さん々と、さんづけでよぼれ、男女

平等、人権尊重のキリスト教の根本思想にた  
って女子教育の必要をお考えになり、明治九  
年十二月末、御苑内の柳原卿の旧邸において  
女子部を開校された。当時の入学生のうち半  
数の五名は寄宿舎生で、そのうちには遠国か  
ら二人びきの人力車で山坂を越えて来た寮生  
もあった。明治時代の寮生活の記録は同志社  
の歴史にはほとんど見あたらないので、二、三  
年前その頃の卒業生富岡としさんを訪問し、

当時の寮生活について承った。富岡さんは明  
治三十二年に同志社女学校文学科を卒業され  
た方で、八十五才とも思われぬお元気で  
私の質問にお答えくださった。

「当時の同志社社長は熊本バンドの一人で、  
直接新島先生から教えを受けた小崎弘道  
先生。女子部の教頭は当時の女子部廃校の危  
機を乗り切られた熱心な教育家松浦政泰先  
生。女子部の全校生徒は約五十名。そのうち  
四十五名までが寮生で、残り数名が通学生で  
あった。卒業は六月。入学は九月に行われ、土  
曜日には授業はなかった。明治二十一年に就任  
されたデントン先生は寄宿舎と棟続きに住ん  
でいられたので、先生の感化によって日曜日  
は安息日としてお洗濯もせず、神と交わる日

として静かに過し、十時から同志社チャペル  
(明治十九年に完成し現存している現中学礼  
拜堂)の礼拝に男女学生が出席した。夜は讃美  
礼拝があった。水曜日の夕べは祈祷会が旧神  
学館(現クラーク記念館)の二階で行われた。  
毎朝起床後お掃除をしてから朝食まで静思の  
時間があり、自室で聖書をよみ、お祈りをして  
朝のひと時を神と交わり、夜は夕食後毎晩夕  
べの集まりがあった。それから二時間の勉強  
時間があり、消灯は九時半でランプを消して  
寝についた。キリスト教信者は半数以上で入  
学後受洗する寮生も多く、礼拝や集会には誰  
一人としてサボる者はいなかった。」このよ  
うに明治時代は女子学生の大部分が寮生で一  
大家族をなし、全生活を通して宗教教育が行  
われ、起きてから寝るまで同志社の香りがし  
みこんでいたといえる。しかし当時の国民の  
心の中にキリスト教は邪教としての考えが根  
強くはびこり、国粹思想のはげしかった頃に  
受洗するのは生命がけであつたらしい。明治  
時代の寮生はこうした激しい時代の波と戦い  
清教徒的なきびしい訓育を身につけ、ひとす  
じに創立者の精神を受けつぎ、骨のある女性  
であつたと思う。

大正時代もその頃の卒業生、片桐芳子姉の話によると「寮では日曜日は安息日として厳守し、上級生は学校や市内の教会等の日曜学校の先生として奉仕をなし、十時からのチャ

ペルの礼拝には全員揃って出席した。夜は讃美夕拝があった。金曜日の夕べの祈禱会には舎監が引率してチャペルに出席した。女子部構内で女子学生ばかりの祈禱会もたびたびあった。寮生は同志社二世やキリスト者の家庭からの入寮生が多くキリスト教の雰囲気では活をしたので大部分の寮生は受洗をして卒業をした」よしであった。

## 二

大正の終りから現在まで四十年間の寮生活を学生として、また寮務主事としてこの目でみ、身心で体験してきた私がおぼつかないながらもその様子を書きしるすことにする。

大正十四年に私は同志社女学校専門部予科に入学し寮生活をした。ちょうどその年が同志社創立五十周年であった。当時の総長は海老名弾正先生、女子部の校長は進取の気性にとみ清廉な松田道子先生であった。土曜日には既に半日授業で、毎朝の礼拝は現在の女子中

高の希望館の場所にあった木造の雨天体操場において、うしろに積み重ねてあった長椅子を並べて行われた。

約二百名の当時の寮生は同志社教会の中心であり、また学校の中心でもあった。日曜日はデントン先生の感化により夜の勉強時間もなく安息日を守り、舎監の先生に言われなくても上級生は下級生を導いてほとんど全員が同志社チャペルに出席した。教会に行く前には九時からラーネッド先生のわかりにくい日本語で聖書の話を承った。夕べにはバトレト先生御夫妻の指導により讃美夕拝があった。金曜日の夕べにはチャペルで祈禱会が行われ、男女の寮生で会堂が一杯になり、つぎつぎに祈りが捧げられ、聖霊に充たされた集会であった。その他の日も松田校長、デントン先生による夕べの集りがあった。私の英文科一年生の冬には同志社教会創立五十周年記念特別伝道大会が計画され、講師としてハワイに伝道中の堀貞一牧師（明治九年に新島光生から受洗、十七年に同志社神学校を卒業）が来られ火のような信仰をもって女子部でも朝に夕に講演会や祈禱会が催され、同志社始まって以来の大リヴァイヴァルがおこり、三三八

名が堀牧師より二回にわたって受洗した。こんな空気がみなぎっていたので礼拝におくれてデントン先生に追いつかれたという学生はごく僅かであった。今から考えると新島先生から直接教えを受けた信仰の人海老名先生や堀牧師により同志社精神をいきいきと示された当時の私共寮生はまことに幸いであつた。

昭和十六年太平洋戦争に突入、寮生は黄色いかたいパンをかじって、勝ちなぐまではぐと頑張った甲斐もなく、昭和二十年八月十五日涙をのんで無条件降服をした。終戦後は新憲法発布、法律改正、学制改革と目まぐるしく変動し、昭和二十四年四月女子専門学校は四年制の女子大学となった。

## 三

現在、女子大学の寮生は全学生の三分の一に近い約六五〇名。そのうち受洗しているキリスト者は僅か三十名。八十名ぐらいの寮生は信者は四、五名という割合で大部分の寮生は入寮後をはじめキリスト教に接するわけであり、少数のキリスト教信者は最先頭になつて主のあかしをなす大切な役目をする存在とな

った。昭和四十二年度の入寮生約百八十名のうち信者は僅か五名である。同志社女子中、高校でも現在の平安寮生は七十一名で、信者はいないとのことである。かつて私が同志社高女部の舎監をしていた時にクリスマスに多くの受洗者をだしたので片桐校長に喜ばれたことや近江八幡の吉田悦蔵氏の双生児の姉妹が、いの一に早天祈禱会に出席し、涙のこぼれる純真な祈りをしたことなど、かくし思ひ出される。また、かつての高女部平安寮舎監富森幽香子先生や沢幸子先生などの熱心なお姿がしのばれる。

現在、女子大学の寮では日曜日に同志社教会や市内の教会に進んで出席することが寮の原則となっている。寮には寮生の互選による委員によって構成される宗教部があり、毎月一回定例委員会が開かれ、宗教的活動について協議、計画がされている。日曜日の夕べは讃美夕拝、その他の日には聖書輪読会、研究会、祈禱会、宗教講演会などがあり、寮生は自主的に参加している。毎日の食事には讃美歌を歌い、食前の祈りを寮生が交代でするなど日常生活を通して神の愛をさとりよう配慮している。

この冬、寮費の値上げをした。早稲田大学、明治大学等学費値上げ反対運動のはげしい時に、四年間値上げしなかったので止むを得ず値上げにふみきったが、最終決定の日には各寮の寮長、副寮長が夕方から早朝まで学生課の先生方と話しあって解決をした。これも時代の反映か、徹夜をしたというので有名になったそうであるが、さすがは寮生たちである。反対のために反対したのはほんの一部分で、学校に要求すべきことは要求し、早期に解決し、卒業試験も受け、一番で卒業したのは寮生であった。そればかりではなく一昨年もその前年も連続して一番で卒業したのも寮生であった。

一昨年、寮生の一人が卒業間近かに病気になる、やっと試験を受けに教室に入った時、ある友人が自分の近くに坐るようにささやいたが、カンニングの誘惑に打克って卒業延期となり、その科目は追試験によって合格し、おくれて卒業した。あとからこの事実をきいて、その寮生にパンザイを



女子大学・新心寮

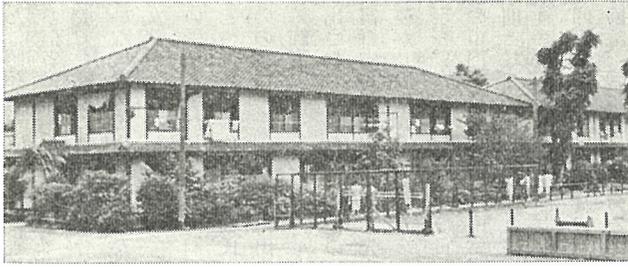
叫びたいほど私はうれしかった。

#### 四

去年のリユニオンに出席した寮生が、他にも宿泊者があったので、寒い応接室で私の足

袋をはいて休み、翌朝記念礼拝に出かける時「結婚に失敗して死線をさまよった時、寮で教えられた神の愛に目さめて生きぬきました」とその感謝に一万円を寮に、一万五千元を記念事業と教会に寄附した。そのお金で暖

常盤寮（女子大学）



くホテルで泊れるものを寮で足袋をはいて寝て寄附をしてくださいました。明治時代からの寮の血が昭和の現代にも受けつがれていると私は信じている。

明治・大正・昭和を通して、い

つの時代でも、信仰的雰囲気の中に起居を共にし共に祈り、互に語りあい、日曜日にはつれだって教会に出席するので、寮生は通学生に比して受洗する率も多く、学校の中心となつて指導的役割を果し、寮内はもちろん学校の友人も交りを通してクラスのパン種となり、

主のあかしをなし良い感化を与えてきた。卒業後は信仰的な家庭を作り、日本全国にあって年々その子弟を母校に送って同志社の発展を念願している。また各地において他の多くの卒業生と共に教会に奉仕し、伝道のためにも活躍して、同志社の香り高きパンを無限に大きくふくらませている。こうしたことは創立当初から全寮主義によってキリスト教主義教育の徹底を念願された新島先生の遺志を受けつぎ、歴代の女子部の校長、学長が寮教育に力を注がれた結果である。殊に片桐学長時代まで寮は学長直屬で（今は学生課に属している）あったので片桐先生は校務多忙の中にも寮務主事たちの寮務日誌まで目を通され、寮生が病氣入院の時は、お見舞に来られた。

末光高女部々長は月曜日ごとに寒い冬も夜の九時にはかつての平安寮にお出でになり、聖書の話しをされたりした。更に寮で育った卒

業生が舎監となつて祈りつつ或時は涙を流し或時はきびしく叱り、或時はやさしく慰め、寮生たちに愛の労苦を惜しまなかつた結果である。

徳富蘇峯先生のお言葉によれば「新島先生は純粋な人間教育家として、一国の塩となり光りとなり骨となり血となり、一国の良心となる人物の養成」を念願されたが、一家の良心となり社会に奉仕する女性を——たとえ知名の女性とならなくても神によるこぼれる女性を——多く世に送りだした寮の役割は実に大きい。

しかし現代は、戦前の寮生の多くが、受洗して卒業した頃とは百八十度の転換となり、一つの寮に信者が数名となつている現状を認識すると共に、同志社女子教育の一端に参与する寮の使命を寮務にたずさわるすべての人が寮生も含めて深く自覚し、互に親しみ相和しつつ神の聖旨に従つて堅実に進みゆかねばならぬ。

（女子大学寮務主事）

× × ×

# 女子卒業生数

1967.3.31.現在

女子諸学校卒業生数						共学校女子卒業生数		
年度	女子大学			高校	中学校	高校	中学校	商業高校
	英文	音楽	家政					
1946	女専27	—	女専160	118	—	—	—	—
1947	49	—	196	145	47	—	—	—
1948	112	—	178	45	268	—	—	—
1949	89	—	137	145	174	—	32(172)	—
1950	146	—	118	229	253	—	47(228)	—
1951	57	2	27	246	280	—	54(308)	2(114)
1952	新制63	5	14	216	270	39(261)	57(310)	4(71)
1953	121	7	21	271	229	68(319)	51(274)	7(79)
1954	184	9	24	283	237	68(343)	52(295)	10(99)
1955	156	7	86	276	236	55(324)	55(279)	19(118)
1956	150	10	88	251	283	47(331)	70(299)	20(118)
1957	155	8	75	271	282	53(360)	72(300)	16(73)
1958	162	19	105	289	291	70(362)	70(298)	11(66)
1959	161	12	119	287	290	94(375)	69(290)	22(100)
1960	175	18	113	290	251	87(363)	75(282)	22(135)
1961	194	16	137	291	259	81(356)	76(300)	22(133)
1962	227	13	136	283	266	89(364)	91(304)	20(100)
1963	240	16	145	251	264	95(346)	88(293)	18(59)
1964	235	20	141	262	272	94(385)	79(299)	12(37)
1965	285	17	165	281	259	107(381)	82(301)	24(86)
1966	283	23	156	284	256	116(397)	101(300)	31(121)
1967	275	17	163	284	249	98(344)	99(302)	4年39(135)
1968	362	22	275	286	240	91(346)	87(305)	3年33(146)
1969	377	28	270	—	—	—	—	2年22(142)

※ 1967年度以降は在校生数

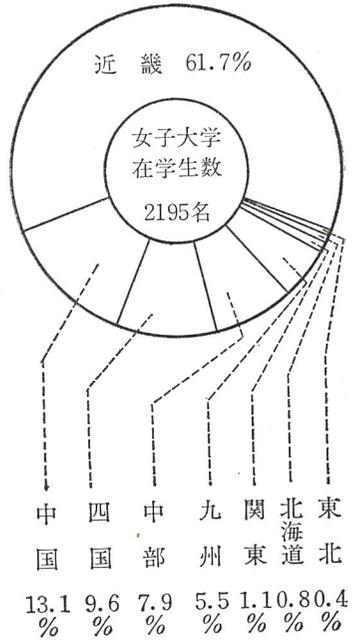
※ 女子大学1946~1955年度は「同志社90年小史」より引用

※ 共学校の( )内は男女合計数

女子生徒(共学)進学・就職数

		年度	1963	1964	1965	1966
高 校	進 学		92	94	102	
	就 職		1	0	1	
商 高	進 学			1	2	3
	就 職			8	18	24

女子大生地方別分布図



女子中高進学・就職数

		年 度	1963	1964	1965
女 子 高 校	進 学 者	同志社大学	114	135	165
		同志社女子大学	32	49	58
		その他の大学	5	8	2
		短期大学	38	36	21
		その他の学校	8	4	2
	計	197	232	248	
校	就 職 者	22	13	10	
	家事従事者	32	17	23	
	総 計	251	262	281	
女 子 中 学 校	同志社女子高校	252	264	254	
	市内公立高校	0	2	0	
	市内私立高校	12	6	5	
	計	264	272	259	

女子大学生出身地別分布数

北 海 道	19	埼 玉	1	静 岡	22	鳥 取	31	佐 賀	8
青 森	3	千 葉	1	愛 知	30	島 根	13	長 崎	8
岩 手	0	東 京	13	岐 阜	28	岡 山	104	熊 本	2
宮 城	0	神 奈 川	1	三 重	44	広 島	106	大 分	18
秋 田	2	新 潟	1	滋 賀	56	山 口	35	宮 崎	9
山 形	0	富 山	24	京 都	413	徳 島	84	鹿 児 島	12
福 島	2	石 川	43	大 阪	411	香 川	29		
茨 城	1	福 井	13	兵 庫	274	愛 媛	77		
栃 木	1	山 梨	5	奈 良	77	高 知	11		
群 馬	7	長 野	7	和 歌 山	84	福 岡	63		

女子生徒出身地別分布数

		女子 中 学			女 子 高 校			高 校	商 高
		1 年	2 年	3 年	1 年	2 年	3 年		
京 都 市	上京区	23	25	27	26	24	31	22	
	中京区	24	31	24	31	27	27	26	
	下京区	22	34	27	29	24	22	31	
	左京区	19	30	42	31	42	44	47	
	右京区	20	22	24	25	14	21	29	
	東山区	22	16	10	13	28	15	15	
	伏見区	16	14	15	14	12	14	24	
	北区	26	14	22	25	29	27	22	
	南区	8	5	11	7	10	8	18	
	計	180	201	202	201	210	209	234	73
京 都 府	乙訓郡	8	7	5	7	10	5	15	0
	綴喜郡	1	1	1	1	4	2	3	0
	船井郡	0	0	4	0	0	3	0	0
	久世郡	2	1	1	2	1	4	2	0
	与謝郡	0	1	0	1	0	1	0	0
	相楽郡	2	0	0	2	1	1	1	0
	宮津市	0	0	0	0	0	1	0	0
	亀岡市	5	3	3	1	3	2	2	0
	宇治市	3	4	5	6	3	0	6	0
	計	21	17	19	20	22	19	29	0
近 畿	大阪府	21	27	18	34	29	24	16	0
	兵庫県	11	10	7	11	8	16	8	3
	奈良県	4	1	2	4	5	6	5	1
	和歌山県	1	2	3	1	2	3	2	0
	三重県	1	0	0	3	4	0	2	0
	計	38	40	30	53	48	50	35	4
北 東 関 中 四 九	北海道	0	0	0	0	0	0	1	0
	北関東	0	0	1	0	0	0	0	0
	中部	0	1	0	1	1	0	1	0
	中国	1	0	2	5	1	1	3	0
	四国	0	0	0	3	1	2	2	3
	九州	0	0	0	2	1	2	0	10
		0	0	0	1	0	0	1	0

大学院 卒業生数

1967. 3. 31現在

研究科	52年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度	61年度	62年度	63年度	64年度	65年度	66年度
修 士 課 程	神学			22 (3)	24	30	18 (2)	14 (1)	15	13 (1)	19 (1)	7	12 (1)	9 (1)	7
	文学			8 (1)	12 (1)	9 (1)	8	12 (2)	13 (3)	9 (1)	17 (5)	23 (7)	16 (4)	15 (5)	25 (6)
	法学			6	9 (1)	10 (1)	6 (2)	5	3	5	5 (1)	10 (1)	6 (1)	4	8
博 士 課 程	経済学			8	11	8	7	9	4	4	1	1	5	3	8
	商学			6	3	7	4	5	4	3	1	1	4	5	13
	工学				11	6	9	13	15	16	11	19	44	28	68
博士課程										工学 1		文学 1	工学 1		工学 1
総計	23	34	41	50 (4)	70 (2)	70 (2)	52 (4)	58 (3)	54 (3)	51 (2)	54 (7)	62 (8)	88 (6)	74 (6)	130 (6)

\* ( ) は女子数、内数で示す



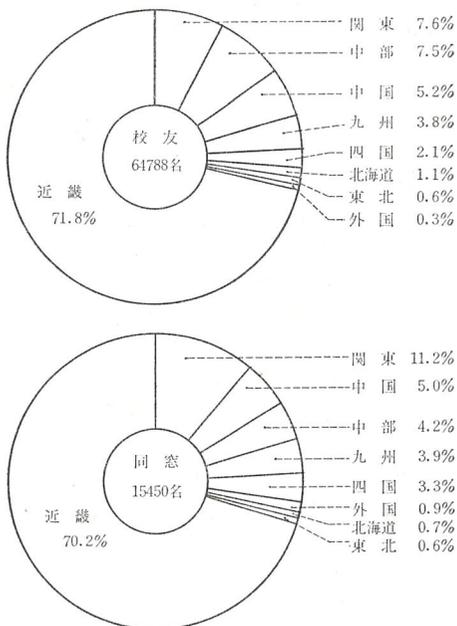
# 校友・同窓分布数

## 校友・同窓都道府県別数

1967. 3. 31現在(死亡者は除く)

地方名	都道府県名	校友数	同窓数	計
北海道		659	102	761
東	青森	49	17	66
	岩手	46	8	54
	秋田	64	20	84
	山形	39	8	47
北	山宮	118	28	146
	福島	69	8	77
関東	群馬	138	34	172
	栃木	63	15	78
	茨城	47	17	64
	埼玉	163	74	237
東	東京	3787	1184	4971
	千葉	212	78	290
	奈良	535	314	849
中部	山梨	30	4	34
	新潟	137	25	162
	富山	198	53	251
	岐阜	530	74	604
	長野	129	24	153
	静岡	527	98	625
	愛知	2724	256	2980
	石川	276	55	331
	福井	347	56	403
	近畿	三重	705	133
滋賀		1683	335	2018
京都		20323	6608	26931
奈良		1209	242	1451
和歌山		612	253	865
大阪		16206	2011	18217
兵庫		5713	1307	7020
中国	鳥取	244	85	329
	岡山	1019	295	1314
	広島	1280	220	1500
	島根	234	51	285
四国	山口	629	119	748
	香取	405	110	515
	徳島	258	133	391
	高知	224	64	288
九州	高知	507	196	703
	福岡	1299	337	1636
	佐賀	133	24	157
	長崎	278	41	319
	熊本	275	62	337
	大分	222	45	267
外	宮崎	132	50	182
	鹿兒島	124	31	155
	計	64788	15450	80238

校友・同窓 地方別分布図



\* 校友=男子校、共学校の卒業生 同窓=女子部卒業生

## 戦後出身校別同窓数

1967. 3. 31現在

学校名	同窓数	年度
(旧制) 高等女学校	226	昭和21年
4年修了	455	22~24年
5年卒業		
女子専門学校	1210	22~26年
女子中学校(新制)*	294	23年以降
女子高校(〃)	4740	24年以降
女子大2年修了	2096	27年以降
女子大学卒業	4726	28年以降

\* 同志社女子高校への非進学者

## 校友男女別比率

	校友数	%
男子	60569	93.5
女子	4219	6.5
計	64788	100

## 同志社女子教育略年譜

- 1875年 同志社創立（11月29日）
- 1876年 女子塾がデビス邸（上京区寺町丸太町上ル）で開かれる。
- 1877年 女子塾を同志社女学校と改称。米国より婦人教師が来校する。
- 1878年 新校舎が上京区寺町丸太町上ルの旧二条邸跡に竣工、移転する。
- 1882年 女学校第1回卒業式が行われ、5名が卒業する。
- 1886年 同志社看病婦学校・同志社病院が開校・開院される（1906年休校・休院）。
- 1888年 女学校に専門科が置かれる（2年制、師範科・文学科・神学科）。  
ミス・デントン、教師として来日（8月8日）。1947年12月24日に永眠するまで同志社女子教育のため尽力する。
- 1890年 新島襄永眠（1月23日）。
- 1893年 女学校同窓会が創設され、96名が入会する。初代会長は能勢道子。
- 1894年 「女学校期報」第1号発行。
- 1897年 幼稚園がデントンにより出町講義所で始められる。1900年、ラーネッド邸に移転、今出川幼稚園と称する。
- 1901年 女学校専門学部が設置される。
- 1903年 バザーが始めて催され、以後、恒例の行事となる。
- 1904年 専門学部を高等学部と改め、文科・家政科をおく。
- 1912年 専門学校令による専門学部の設置が認められ、英文科、予科、国文科、家政科研究科を置く。
- 1920年 女専卒業生の同志社大学への入学が許可される。
- 1922年 松田道、専門学部・普通学部の校長となる。
- 1928年 女学校普通学部を女学校高等女学部と改める。
- 1930年 女学校専門学部を女子専門学校、女学校高等女学部を高等女学部と改める。
- 1931年 同窓会名を「同志社女子同窓会」と改める。
- 1932年 栄光館竣工す。同窓会名を「同志社同窓会」と改める。  
新島八重子永眠（6月14日）。
- 1933年 片桐哲、女専校長兼高等女学部長に就任。
- 1935年 今出川幼稚園の経営が、同窓会から同志社に移る。
- 1940年 同窓会館が竣工し、1階を幼稚園、2階を同窓会館として使用を始める。
- 1941年 日米関係悪化のため外人宣教師帰米す。デントンの功績を表彰してパイプオルガンが太平洋婦人伝道協会から贈られる。
- 1944年 戦争激化のため幼稚園休園す。学徒動員令により女子学生も勤労動員される。
- 1945年 高等女学部を高等女学校と改める。
- 1946年 今出川幼稚園再開す。
- 1947年 学制改革により高等女学校が女子中学校、女子高校となる。  
今出川幼稚園を同志社幼稚園と改める。
- 1949年 同志社女子大学設立される（初代大学長 E.L. ヒバード）。
- 1956年 「同窓会報」創刊号を発行。
- 1967年 女子大学に家政学部と大学院（英文学）を新設する。